

芸の継承

—植民地時代の上海・高雄・京城花街（かがい）の歌舞音曲を中心に—

中原 逸郎(楓錦会)

花街(かがい)は芸妓等芸能者による芸(歌舞音曲)で顧客をもてなす場で、元禄時代(1688-1704)以降、三味線音楽の発展に連れて盛んになった。日清戦争後に始まる日本統治時代には被統治国にも多くの日本式花街ができた。これら花街では異国音楽と邦楽が接触し、新たな音楽シーンを生んだと考えられる。しかし、音楽学分野でもその研究は限られた状況にある。

本報告では時間が経ち、統治時代の花街に関する情報が少なくなっている中、文献資料を中心に、発表者が実施した中華民国・嘉義市にあった日本式花街の元芸妓に関する聞き取り(2016:日本オーラル・ヒストリー学会)の知見も加え、資料を入手できた上海、平壤、京城、台南、高雄の日本式花街の芸の実態にせまることを目的とした。

調査では、日本統治時代の日本式花街は嘉義市の事例のように、本土から歌舞音曲の師匠が通う日本式歌舞音曲の伝搬の場であった。その一方、日本式花街の進出で現地芸能者(芸旦、妓生等)は働く場所が狭められ、やがて土俗の芸能者や芸も所在が判然としなくなった。

こうした状況下、現在、台南、高雄(ともに中華民国)では日本式花街地区を歴史的地域として記録し、建築物を残そうとする動きも確認できた。また、本発表の調査地では日本統治時代に伝搬した日本の芸の伝統を確認できなかったが、コリア(旧朝鮮地区)では日本花街進出による検番(事務所)制度の導入が、後に妓生の芸能者としての自覚と団結をもたらし、妓生の芸が無形文化財に指定される一因となったという報告も確認できた。